MEGUNA NAKA

中 恵菜のこれまで そしてこれから

インタビュー：2025年11月某日

ヴィオリスト、中恵菜さんに初めてお会いしたとき、なんだかキラキラと輝いている方だな、という印象を受けました。全体を優しく見渡すその眼差しからは音楽はもちろん、作品や共演者への深い敬意が自然と伝わってきます。

恵菜さんが音楽と、そしてヴィオラと出会い現在に至るまでの歩みをぜひあたのしみください♪

小学2年生の時、
京都から東京へ引っ越したことをきっかけに

桐朋学園子供のための音楽教室へと入室します。

恵菜さんにとってドキドキする場所だったそう。

はじめこそ緊張していましたが次第に仲間も増えて楽しかったです。

教室で出会ったのが、久保 良治 先生

小学2年生～中学3年生まで師事

厳しくもありましたがとてもあたたかな指導をいただきました。

小学5年生で愛知へ引っ越し、中学時代は京都で過ごしましたが東京の久保先生のところへ毎週通っていました。

私がまだ母のお腹にいた頃、母が聴きに行ったコンサートでヴァイオリンの音に私がすごく反応していたそうです。そんなこともあって、母は「この子にはヴァイオリンかな」と思ったみたいです。

気付いた頃には楽器をやっていましたね

ヴァイオリンとピアノを習ってました。

ヴァイオリンが選ばれた理由はこんなところにも

4歳からヴァイオリンを始められた恵菜さん。
ヴァイオリンを選ぶきっかけの1つには
8歳年上のお姉さまの存在がありました。

チェロを習っていた

と思っていた時、

姉妹で同じ楽器はイヤ！

と、お姉さまからの声があり、チェロではなくヴァイオリンを習い始めます。

音楽と同じくらい負強もすきだったとうかがいました。いつ頃から音楽の道へ進もうと考えられたのでしょうか？

小学生の頃はヴァイオリンよりも負強の方がむしろすきでした。中学になり両立させようと頑張っていたのですが、なかなか大変でした。

中学くらいから段々ヴァイオリンにシフトした感覚がありますね。

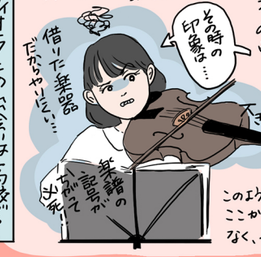
そこで高校は、桐朋女子高等学校音楽科へ進学することにしました。

ヴィオラとの出会いは高校で？

子供のための音楽教室のオーケストラの授業で弾いたのが最初でした。

↓

オーケストラでヴァイオリンのメンバーが順番にヴィオラを弾くことになり、恵菜さんの番がやってきました。



この時はマイナスの感情の方が多かったんですね

このようなヴィオラデビューでしたがここから続いていったわけではなく、一旦はここで終わりました。

桐朋女子高等学校音楽科へ入学

ここから本格的にヴィオラを習いはじめることに！

室内楽がやりたいというより、単純に誰かと一緒に弾くと楽しいんじゃないかという思いがありました。他の人や上手な人と弾くことで刺激を受けたいという考えもあったと思います。

自分がファーストで絶対にやりたい！ではなく、みんなで弾いてみたいという気持ちがすきだったそう。

ヴィオラのあとに

ヴィオラを弾くと音程感や音を広げる幅が全く異なるので、そのままの感覚で弾くと音がドン！と高くなってしまったり。

楽器のサイズや音部記号の違いといった苦労はもちろんありましたが、高校はヴァイオリン専攻だったので、ヴィオラとヴァイオリンのスイッチが特に大変でした。

大変だったことはありますか？

高校1年から室内楽でヴィオラを始め、2年生ではトリオからカルテットを組むことになりましたが、その頃にはヴィオラが楽しくなっていたため、恵菜さんはヴィオラを続けてゆくことにします。

高校2年生の時点で周りからはヴィオラの人と思われていました。

桐朋学園大学へと進学

ヴァイオリンとヴィオラ

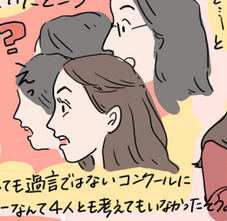
高校はヴァイオリン科で卒業、大学1,2年生はダブル専攻、3年生でヴィオラに転科します。

ダブル専攻時代にヴィオラの先生となったのが佐々木 亮 先生

先生の演奏を聴いて「ヴィオラってこんなにいい音が出るんだ。」と衝撃が走りました。それから先生のヴィオラが大好きです。すごい人に習えるんだと思いました。本専攻になった後も佐々木先生に師事しました。

音楽的なことは弾いて見せて下さって、テクニックの部分を言葉で仕込んでいただきました。

2015年、大学で組んだカルテットで
礒村和英先生の授業を受けていたところ



とその場のノリと勢いでエントリー

挑戦すると決まったからには全力で！
とそこから1年は
ヴァイオリンを弾かず
とにかくヴィオラの毎日。

一番大きいと言っても過言ではないコンクールに組んで1年でエントリーなんて4人とも考えてもいなかったそう。

なんと9曲ほど1年で用意しなくてはいけなかったとか！

2017年 ドイツ・ベルリンへ留学

ヴィオラという楽器と室内楽でずっとやってきてはいましたが、ヴィオラだけに向き合う時間は少なかったので、学生時代からヴィオラを集中して習いたいという思いがありベルリンに行く選択をしました。

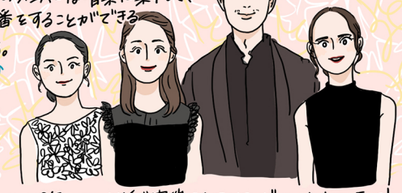
ハンス・アイスラー音楽大学へ留学

日本で数回レッスンを受けていたヴァルター・キュスナー先生に師事。

よーし！これから腰を据えて楽器の事を学ぶぞ！と思っていました。

結成から月日が経ち、2025年には10周年を迎えました。恵菜さんにとってアマービレのメンバーは音楽に集中して、一緒にしびれるような本番をすることができる貴重な存在だと言います。

これは！という演奏を一緒に出来るメンバーなのでね！



翌年、2016年秋、
Quartet Amabile【クァルテット・アマービレ】は、
「ミュンヘン国際コンクール
弦楽四重奏部門」にて3位!!
併せて委嘱新作特別賞を受賞

2019年には、NYで開催されたヤングコンサートアーティストのオーディションで優勝もされています。

しかし！その思いとはすこし違って…

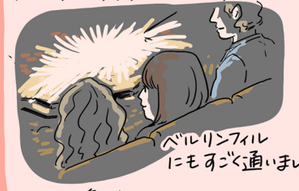
日本でのカルテットのコンサートのオファーが沢山！

入賞の翌年だったため、ありがたいことに沢山演奏の機会をいただきました。

ソリストとしての負強と日本でのアマービレの本番、結構大変ではありましたが、インプットとアウトプットをくり返しながら、自分の中で試行錯誤をしていた時期でした。

次ページへつづく

ベルリン留学中、多い時は、1ヵ月のうち半分日本にいたこともあったほど、行き来していたそうですが、ベルリンに滞在していた時間はかけがえのないものだと言います。



ベルリンフィルにもすごく通いました。

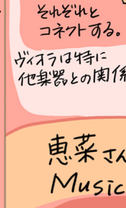
現地の音や生活を体感できたことはとても貴重な経験

自分の中の音楽的な引き出しを増やしてくれました。

ソロの負強といいながら、ベルリンでも室内楽を組んだり、アルテミス カルテットのファーストヴァイオリンの方のレッスンを受けたりとたくさんの刺激を仲間や周りの人々からもらったそうです。

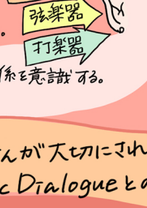
それから、オケでは「耳の使い方」を特訓できました。

今までの耳



室内楽をすることが多く、少人数の音を聴く耳になってしまっていた。

オーケストラで必要な耳



より多くの音を聴き、それぞれとコネクトする。

ヴィオラは特に他楽器との関係を意識する。

自分の音に集中するというよりも周りを見ることにより集中するイメージです。

たしかにトラックだと周りが見えていないとまがり角で壁にぶつかってしまいますもんね。

オーケストラは、大型トラックを運転する感じ

あくまで私の中の感覚ですが…

オケと室内楽とではかなり感覚がちがうのですね！

ハンス・アイスラー音楽大学 ベルリンマスター課程を修了し、2020年 帰国

修了試験後、すぐに日本で仕事があったためとりあえず帰国

するとコロナウィルスの影響でロックダウンに。戻るに戻れないとなって現地の業者さんに頼んで引っ越しをすることに。

全部おねがいします!!

予期せぬ慌ただしい巣立ちになってしまったんですね。

ありがたいことに帰国後すぐくらいのタイミングで声をかけていただきました。

2021年4月 新日本フィルハーモニー交響楽団に入団

オーケストラに入って思ったのは経験がものを言う仕事だという事。室内楽の経験は多くいただいていたのですが、オケはそれと比べると圧倒的に少なかったので新日本フィルにいた3年間はとても負強になりました。

新日本フィルハーモニー交響楽団
退団後はフリーで活動。

多忙なオケにいる中でもうすこし落ちついて全ての演奏に向き合うため退団を決意。

自分のヴィオラと向き合う時間は増えたと思っています。バランスとしては室内楽が一番多いと思うのですが、ソロをいただく機会もあるので、ソロ、室内楽、オーケストラとやっている感じです。まだ退団から2年程なので、どういう風な活動が自分にフィットしているのかな？という部分を模索しながら自分のペースをつかみ始めたところです。

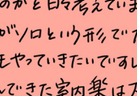
恵菜さんが大切にされてきた室内楽、Music Dialogueとの出会いは？

ベルリン留学中ですね！

芸術監督の大山平一郎先生とは2018年3月のMusic Dialogueの東京塾にお声がけいただいてその時に初めてお会いしました。

辻本玲さん（チェリスト）経由で、「こういうん（＝恵菜さん）がベルリンから帰ってくる」と聞いた大山さんは…

とにかく東京塾に来てもらって、演奏をききたい



あ、そうなんだヴィオラすごく必要だよね

大山先生が恵菜さんに声をかけたのにはこんな経緯が

恵菜さんのヴィオラをきいた大山先生の反応は

素晴らしかった

その後、シャネルの室内楽シリーズにアンサンブル枠として声をかけていただきました。

シャネルでは海外のアーティストとの共演の機会をいただけたりしてとても刺激になりました。すごい方々とご一緒できて、やっぱりあの空間は特別でしたね！

遠慮してない？遠慮してるでしょ

初めての現場でかたかったのかもっ？

大山先生に最初こう言われたのをなぜだか覚えているそう。

2022年 CHANEL PygmalionDays
室内楽アーティストになり、
そこでも大山先生と共演させていただきました。

先生には色々なことを教えてもらって、アマービレでもとてもお世話になっています。

これからのこと

私は、ヴィオラという楽器の持つ可能性をより多くの人に広めていきたい、という思いが一番にあり、みんなに興味を持ってもらうためにはどうしたら良いのかを日々考えています。
それがソロという形で広がっていくのであれば、ソロもやっていきたいですし、一方で、一番長く取り組んできた室内楽は大好きなので、これからも大切に続けていきたいと思っています。
これからもオールマイティーにさまざまなことに挑戦し、ヴィオラの魅力を伝えたいです。

私の肌感なんですけど…

最近ヴィオラという楽器がどんどん認知されている感じがありますよね!?

新たなヴィオラのコンクール誕生

ヴィオリストがソリストとしてオケとも共演

作曲家がヴィオラの作品をかくことも増えている

すごい！嬉しいです。学生の時は私しかヴィオラ専攻はいないくらいだったので…

ヴィオリンから始める方が多いようですが、今後、ヴィオラを最初から始める方も増えるかもしれないですね!!

ヴィオラの曲は少ないけれど、いろんな楽器のアレンジや歌曲のアレンジは得意なんです。

広い幅があるところはヴィオラの特徴です。

可能性がたくさんある楽器なんですね！

正直なところ、海外については、ほんの数%ですが、もう一度住んでみたいという気持ちが頭の片隅にあります。なので、海外のオケのオーディションをチェックしたりはしています。実際に今、海外で生活したり働いたりしている友人たちの話を聞くと、あちらの空気の中で暮らすことはやはりとても魅力的だと感じます。そうしたことから、海外での活動も視野に入れるようにしています。

Q.教えることについてはどうですか？

個人的に指導することはありますが、学校で教えるような経験はまだなく、以前から興味があります。実際に自分が教えるという経験をして感じたのは、教える側こそ、日頃から学び続け、考え続けていかなければならないということです。
教えることを通してこそ、自分に何が必要なのかも見えてくるのだと思っています。

もっと学びたい、という姿勢を忘れず、探究心をもってヴィオラと向き合う姿。そして音楽を通して人とつながる喜びを大切にされていることからも、楽器への深い愛情が伝わってきました。ヴィオリストとして、これから新たな可能性をどこまで拓いていく存在なのではないでしょうか。原点を大切にしながら、新しいステージへと踏み出す姿を、今後も楽しみにしています。

絵と文 Sumire AKASAKA